

Our manifesto

ユニオンぼちぼち

おおさか ばんぱく 　 ゆめしま 　 な 　 じんこうとう 　 にんげんせんたくき 　 そら と 　 くるま
大阪に万博がやってくる。「夢洲」と名づけられた人工島に。人間洗濯機や空飛ぶ車といっ
たかつての夢の道具たちが並ぶ。

でも、ちょっとまって。夢のような道具たちが並ぶ夢の人工島の地中には、もっと面白いも
のがあるから。経済発展と大量消費の影がそこには埋まっている。戦後、大阪平野で暮らした
ひとびと　ひびつく　だ　やま　ろうどう　せいぞん　ざんがい　じだい　い　し　し
人々が日々作り出した山のようなゴミ。労働と生存の残骸。それは、その時代に生きて死んだ
ひと　ゆめ　かけら
人たちの夢の欠片だ。

さかのぼろう。はるか昔、まだ文字をもたなかった人々は、貝殻や魚の骨、使わなくなった
道具や装飾品を集めて捨てていた。それは後世の人に貝塚とよばれた。わたしたちはその貝塚
から、人々がそこで貝を拾い、魚を捕り、食卓を囲んでそれらを味わい、排泄し、祭り騒ぎ、
ちよつとしたことで笑い、泣き、そしてゴミを積み重ねていた過去を、確かに想像する。一万
ねんご　ゆめしま　かいづか　じだい　ひとびと　はつくつ
年後、夢洲も貝塚としてその時代の人々に発掘されるかもしれない。

こんかい 　 いちまんねんご 　 み 　 ひとびと 　 れんたい 　 げんざい 　 い
今回のメーデーは、一万年後のまだ見ぬ人々との連帯をめざし、現在を生きるわたしたちの
にちじょう　かいづか　みらい　さ　だ　すこ　まえ　じかん
日常を貝塚として未来に差し出そうというもの。そして、わたしたちより少しだけ前の時間を
い　ひとびと　く　そくせき　ふ
生きた人々が、そこで暮らした足跡にも触れようというもの。

にほん 　 うんどう 　 ねんだい 　 わかも 　 ろうどううんどう
日本でユニオン運動がはじまった1980年代、若者・フリーターの労働運動がはじまった2000
ねんだい　きょうとし　みなみく　ひがしくじょうかみ　ごりょうまち　ちい　つくえ　せいり　かみ　たば　ぼしよ
年代。京都市南区東九条上御霊町の小さな机と整理できない紙の束。そんな場所にわたした
ちが集い、語りあい、うごめき始めた。地域ユニオンはそうやって寄りそった不穏な者たち
が、その土地で生を重ねてきた運動だ。

にほんしゃかい　かいそう　か　すす　りんじん　おな　しよとく　ひと
日本社会の階層化はますます進み、隣人はいつしか同じような所得やライフスタイルの人ば
かりになっている。知りたいことを検索できるインターネットは便利だが、いつしか見たいも
のだけを見て、共感できる意見しか目に入らなくなる。遠ざかった他者はますます理解しがた
いもの　きょうふ　ぞうお　ふ　ごうり　こうげき　たいしやう
い者となり、恐怖や憎悪、不合理な攻撃の対象となる。

でも、わたしたちは異なる者たちと出会う可能性を忘れない。主流の生き方も、非主流の生
きかたも、おたがいの日常を知りあい、困難を分かちあうことで、それぞれをちょっとましにで
きるかもしれない。その何か、わたしたちが生きていく中でどうしても作り出されてしまうよ
うなゴミを、排泄物を、思考を、情動を、表現を、そのどれでもないような何かを、一万年先
む　な　う　かいづか　つく
に向けて投げよう。埋めよう。貝塚を作ろう。

おおさかばんぱく 　 てんじ 　 ろうどう 　 しょうひ 　 た 　 ね
大阪万博のどんな展示より、わたしたちが労働して、消費して、食べて、寝て、ウンコして、
よろこ　かなし　に　だ　たたか　すがた　そうぞうてき
喜んで、悲しんで、逃げ出して、ときに闘う姿は、いつだって創造的なはずだ。

ろうどうしゃ　しゆくさい　ぜんせかい　ふおん　もの　あつ
この労働者の祝祭に、全世界の不穏な者たちよ、集まろう！